ただ、それだけを知りたい

カーテンコール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ただ、それだけを知りたい

【Ｎコード】
Ｎ４７７６Ｚ

【作者名】
カーテンコール

【あらすじ】
土砂崩れで死んだ、１人の青年。異世界へと生まれ変わった彼であるが、再び与えられたその命には、大きな制限が掛けられていた。運命に翻弄される彼に、果たして『救い』はあるのだろうか……。

終わらない、絶望への序曲

人は、桜が如く。

ただひと時咲いては散り、後に残るは醜い枯れ木のみ。

……これは一体、誰の言葉だったろうか。

「最悪、だな」

過剰なほどに整備された白い建物を見上げながら、そんな台詞が口を衝いて出た。

こんなに気分が悪いのは、生まれ変わった初日と『あの日』以来。

……俺は、死人だ。正確には、1度死んで再び生まれた身だ。

輪廻転生。元は仏教だか密教だかの用語らしいけど、生憎俺は前世(むかし)も現世(いま)も無神論者だから、詳しくは知らない。

けどとにかく、その転生とやらを経た人間であることは間違いないと思っている。

忘れもしない。あの日、土砂崩れに巻き込まれて死んだ前世。

それから碌な間さえ置かず、再び赤ん坊になった。

「あれから、15年と少々」

容姿も変わった。

在り方も変わった。

変わらなかったものなんて、見付かりそうにないくらい変わった。

俺も……世界も。

「インフィニット・ストラトス……」

通称ISとも呼ばれる、大気圏外長期活動用マルチフォーム・スーツ。

……などとは名ばかりの、危険極まりない兵器。その圧倒的技術

力により作られた、云わば時代を先取りしすぎた存在。

そして俺の、全てを狂わせた災厄（モノ）。

「ちぃっ」

舌打ちのひとつもしたくなる。

ＩＳさえ無ければ、俺のこの第２の人生が狂う事は無かった。

神など信じていないこの身だけれど、もし居るとするなら住処まで乗り込んで、殺してやりたい。

ややこしい真似をしてくれた、死んで詫びろと声高に叫びたい。

お陰で俺は――否。

居もしない存在に文句を言ったところで、壁に怒鳴るのと同じだ。

そんな無駄な事、してもしょうがない。

結局のところ、俺のこの非力な腕では何も出来ないのだから。

「……」

分かり切っている。

俺に出来る事なんて、何も無いってぐらい。

「……時間だ」

腕時計の短針が、そろそろ8を刻もうとしていた。

もう行かないと――初授業に遅れてしまう。

俺はひとつため息を吐いて。

先程から見上げていた建物……『IS学園』に向けて、足を踏み出した。

「最悪、だな」

最後にもう1度、同じ言葉を呟いて。

本当の『3人目』

6月終盤。

ここＩＳ学園では中止という形にしろ、つい先日大きなイベントであった学年別トーナメントも終わり、更に1年生は臨海学校が目と鼻の先となった時節。

しかして今日この日は、何事も無く過ぎ去るごく普通の日。

その筈だった。

「転校生？　また？」

1年1組の教室。

そこで俺は、何故か待ち構えていた鈴に捕まり、『転校生』の話題を聞かされていた。

「そうよ。うちのクラスがその話題で持ち切りで、うるさいから逃げてきちゃった」

「フン、白々しい……」

何故か不機嫌な箒。一体どうした、カルシウム不足か？

煮干し食え。

「……一夏。何か今失礼なことを考えなかったか？」

「いやそんなまさか」

危ねぇ。心を読まれた。

「けど、やっぱり1組なのかな？」

そう言ったのは、つい先日『シャルル』から『シャルロット』として再転入した友人。

鈴の話からすると、そうらしい。また山田先生の睡眠時間が削られそうだ。

「しかし、転校生か。もしかして男だったりしてな」

「それこそ有り得んだろう。男のＩＳ操縦者は、お前と……」

ちらと、教室の一角を一瞥する箒。

そこには、ラウラとセシリアを相手に話しかけているもう１人の『男子生徒』が居た。

「あの下衆だけだ」

「下衆って……そりゃ言い過ぎだぞ箒」

「あのような輩、下衆で十分だ。見られるだけで虫唾が走る」

プイッと顔を背ける箒。余程あいつが嫌いらしい。

箒だけじゃない。鈴は頷いて肯定してるし、シャルロットも苦笑

はすれど否定はしない。

……ついでに言えば、あいつに話しかけられてるラウラやセシリアも、思いっきり不機嫌を露わにしてる。

それでも必死になって話しかけてるあいつが、何だか可哀想になってきた。

よし。ここはクラスメイトにして唯一の同性である俺が、さりげないフォローを――

「お前達！　ホームルームだ、さっさと席に着け！」

しようと思ったところで、千冬姉が出席簿片手に教室に入ってきた。すまん、無理だった。

刹那、『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』さながらの速さで席に戻るクラスメイト達。すげえ。

鈴も以前の恐怖からか、いつの間にか消えてた。

「ふん、やればできるじゃないか。では山田先生、頼んだ」

「……あ、はい……分かりましたぁ……」

いつものようにバトンタッチされた山田先生から、いつもと違っ

て魂が抜けていた。やっぱり睡眠時間削られてたらしい。

「えぇっと……知ってる人はもう知ってると思いますけど……ホームルームの前に、転校生を紹介したいと思います……もうほんと勘弁してください、私の睡眠時間が、あぁぁぁ……」

今にも処理落ちしそうだ。惨い。

「転校生だと!?」

バン、と立ち上がる音。

振り返ったら、後ろの席であいつ……銀崎(ぎんざき)が驚いた風に山田先生を見てた。

てか、あいつ知らなかったんだ。

ラウラとシャルロット、それに鈴の時は凄い詳しく知ってたから、そういった情報に関しては通だと思ってたけど。

「席に着け、銀崎」

「っと……すいません、織斑先生」

千冬姉に睨まれて、座り直す銀崎。

けどその顔には、未だ疑問の表情がありありと出ていた。

「（しかし本当に1組だったな。もう今更だけど、本当に分散させないでいいのか？）」

至極まっとうな事を考えていたら、教室の扉が開かれた。

あれ、何かこのパターン前にもあった気がする。

「……」

無言の入場。あ、これも前にあったパターンだ。

よし、『P（パターン）・ラウラ』と名付けよう。今決めた。

うんうん、俺って結構センスあるんじゃないか？

「……」

そんな下らない事を考えていたら、ふと教室のざわめきが消えている事に気付いた。

何だ？　今度は『Ｐ・シャルル』か？

「……へ？」

考えながら、転校生の姿を見遣って。

思わず声が出た。

ざわめきが収まる訳だ。何故なら。

その転校生が――俺が半ば冗談で言った通り、『男』だったのだから。

2人の転生者

さて。俺は今、ひっじょーに困惑している。

え？　俺は誰かって？

そんな！　この俺、銀崎飛竜（ひりゅう）を知らない！？　寄る年波の所為でボケた神様に間違って殺され、その侘びとしてここ『インフィニット・ストラトス』の世界に転生させて貰って、ヒロイン達で構成したハーレムを築く為に日々奮闘しているこの俺を！

……どうにもフラグ立てが難航してて、未だ1人も落とせてないけど。

箒や鈴はまあ仕方ないにしても、他の3人はいけると思ったのに。

原作ではどうなるにしろ、少なくとも最初の条件は一夏の野郎とイーブンだったんだから。

けど実際は、クラス代表決定戦では一夏と違って俺は専用機到着が間に合わず、結果セシリアと戦う事無く棄権。一夏にまんまとフ

ラグを盗られた。

シャルロットとラウラの時だって、何故かいいタイミングで必ず何らかの邪魔が入って撃沈。これが原作の修正力ってやつか！？

だが俺は諦めない！　元はライトノベルだろうとここは現実、アピールを続ければきっといつかは報われる筈だ！

もっとも彼女達からすれば、同性ゆえに一夏が気安く接してくる俺は、云わば邪魔な存在らしくて邪険に扱われる事もしばしばだけど。

ああいや、それとも気を引こうと色々やったのが問題だったんだろうか……悩む。

おまけで神様から頭脳や運動神経、それに一夏級のイケメンフェイスを貰ったから、見てくれとかが原因とは思えないが。

……まあいいさ！　学生生活は始まったばかり、まだまだチャンスはてんこ盛りだ！

それに例え、今の5人が駄目だったとしても。まだ生徒会長の更識楯無に妹の簪、臨海学校で出会うナターシャさんとか、美人は山ほど居るし！

ちなみに更識姉妹とはまだ接触してない。楯無先輩は迂闊にこちらから接触したら怪しまれかねないし、簪の方は純粋に見当たらない。

４組も整備室も結構虱潰しに探してんのに、なんで？　いつも行

った時居ないんだよな。

仕方ないから、気長に向こうからアクション起こすのを待ってる。

……俺の現状はこれぐらいでいいか。それより今は緊急事態だ。

「では……自己紹介を、お願いしますぅ……」

静まり返った教室、電子パネルの前に立つ男。

そう、『男』なのだ。

ラウラよりも長い、腰どころか膝まで伸びた赤髪。

若干吊り上った双眸に収められた、無機質染みた黒い瞳。

ほっそりとした整った顔立ちに、右眼の下から頬にかけて、ムカデのようなタトゥーが刻まれてる。

普通だったらあいたたたーなその装飾が、とんでもなく様になってた。

全体的に細身だが、軟弱さや貧弱さがまるで感じられない。

そして極めつけは、着ているその学生服。

ＩＳ学園の男子制服は、一夏や俺が着ている襟元だけ黒く、全体が白の配色がベースだ。

けど赤い髪の男はそれが逆転してて、襟元だけ白く全体が黒の制服姿。

なんかこう、ダークヒーローっぽくてカッコいい。是非真似してえ。

けど簪が好きそうじゃないなあれ、止めた。

「……」

とにかく、バカみたいな美形。

あんな見てくれ自然発生するわけねえ。どう見ても俺と同じ『転生者』だ。

「そうだ、そうに決まってる……」

「私語は慎め銀崎」

バゴス！

「ぐべらっ！？」

織斑先生に出席簿で殴られた！　滅茶痛え！

……と、とにかくだ。あいつが転生者ならば、これから先俺のハーレムを築く障害になりかねない。

ただでさえ難航してるってのに、これ以上敵が増えるなんて御免だ！

……ここは一発睨みを利かせておくか。

喰らえドラゴンアイ！！　飛竜だけに！！（ただのガン飛ばし）

「……」

気付かれさえしなかった。泣きてえ。

つうかこの野郎、何で目にハイライトが無いんだよ！　その所為で何見てんのかさっぱり分かんねえよ！

ああ遣り辛い！　てかいい加減なんか喋れよ！　「またですか～？」って、山田先生泣きそうになってんじゃん！　泣いてても可愛いな畜生！

それにラウラが「何か転校初日の私を思い出す、鬱だ……」とか落ち込んでるじゃねえか！　俺の未来のハーレム要員に何しやがる！！（現在好感度最低）

これからこのクラスの一員としてやっていく気あんのか？　無い

なら無いで俺は助かるが。

「……ふぅ」

……お？　ようやく口を開けたぞ。

さあどうなんだ。フレンドリーにするのかしないのか！

「……」

口を開けて、少々の間を置いて。

紡がれた言葉を聞いて、俺は心底安堵した。

「……雌臭い……最悪、だな」

ああ。こいつクラスに馴染む気、全く無いや。

気分次第のコイントス

「……雌臭い……最悪、だな」

教室に入った最初の感想としては、これが最も適切だろう。

一瞬前と比較してあからさまに空気が凍りついたが、別に気にするような事じゃない。

「複数の香水やらコロンやらが混ざり合って、花が腐ったような酷い臭いだ。これが普通だと言うのなら、俺は明日からガスマスクを持ってくる必要がある」

「……ふ、ふえぇ……」

俺の横に居る背の低い副担任……確か山田。

そいつが何か言いたげに涙目で俺を見ているが、生憎発言を改める気は無い。

黒髪の担任は、今のところノータッチを決め込んでいるみたいだしな。

「ああ済まない、自己紹介だったか？　だがしかし、ただクラスが同じだけの腐臭を放っている輩どもに、果たして名前を教えてやる必要があるのだろうか」

「何という暴君、ラウラより酷い」

「銀崎！　私と比べるな！」

教室の後方に居た男のぼやきに、眼帯を付けた銀髪のチビが怒鳴る。

……何で小学生が混ざってるんだ？　飛び級（スキップ）にしても幼過ぎる気がするが。

「銀崎、ボーデヴィッヒ、黙れ。それとお前も、自己紹介ぐらいまともにやれ」

流石に目に余ったらしく、黒髪の担任から咎められた。

けれど足りない。まだ俺の人格を知らしめさせるには、少しばか

り。

「ふん……自己紹介、自己紹介ね」

やる意味は無いが、やらない理由も無い。

そしてやらなければ、いい加減横の副担任が泣きそうだ。

仕方ない。いつものアレで決めよう。

「こいつが表なら、やるとしよう」

ポケットから出したのは、愛用のコイン。

親指に挟んで、弾いた。

くるくると回り、落ちてきたところをキャッチする。

手の甲と掌で挟まれたそれを――

「……っ」

祈るような目で見てる山田が居た。

バカなのかこいつ。必死過ぎるだろう。

担任の方は、やはりノータッチだ。

山田に任せてるのかどうか知らないが、少しは助けてやったらどうだ？

原因である俺が言えた義理ではないが。

「……ちっ」

どうでもいい事を考えつつコインを見てみれば、表。

これで俺は、自己紹介する事を余儀なくされたわけだ。

「ふん、運が良かったな」

「はふぅ～……」

安堵する山田。小動物か。

ポケットにコインを戻し、改めて教室を見据える。

……とは言えど、俺の駄視力では精々人数ぐらいしか把握出来んが。

「担任。自己紹介とは名前だけでいいのか？」

「目上には敬語を使え……散々待たせたんだ、好き嫌いや特技も言え」

「自分勝手だな。まあいい」

よく見えはしないが、恐らく教室内の殆どが「お前が言うな」と思っているのだろう。

俺の最初の発言からして、歓迎ムードとは程遠い空気だしな。

「久々津（くぐつ）・オテサーネクだ。好きなものは無い、嫌いなものはたった今からお前達だ。特技は絵」

我ながら何とも投げ遣りだな。

当然誰も何も言わない。異質にして異物な俺に対して、持ち得る感情を見失っていると言ったところか。

だがこれでいい、これで。

「で、副担任。俺の席はどこでしょうかね」

「……あ、ふえ、はいっ！　あ、ああああそこですっ！」

言葉を失っていた山田が、慌てたように教室の隅を指す。

無言の室内を歩き、俺は席へと向かった。

「な、なんなのあの人……」

「怖いよ……」

ぼそぼそと聞こえてくる囁き。

どれも、俺に対して否定的なものばかり。

「（そうだ、これでいい）」

これで――

誰も俺に、近付かない。

嫌われ者の赤蚣

「何なのだあの男は！」

食堂のテーブルを叩き、憤慨する箒。

おい止めろよ、壊れるって。

「全くですわ！　当然のように無礼を振る舞うあの姿勢、気に入りません！」

「転校当初の私はあれに近い感じだったのか……凹むぞ」

「あ、あはは……」

セシリアは箒に全面同意、ラウラは少なからず自分の行いを思い返して落ち込みモード。

例によって、シャルロットは苦笑気味だ。

「そんなに酷いわけ？」

「そりゃあもう。朝の自己紹介以降全然喋らないし、誰とも目さえ合わせようとしない。山田先生最後の方泣いてたよ」

「あんたには聞いてないのよ銀崎」

「酷い！　せっかく教えてあげたのに！」

唯一クラスが違う鈴の質問に答えたのは、俺が昼食に誘った銀崎。

鈴、確かにそれは酷いぞ。

銀崎は結構いい奴なのに……たまにおかしなこと言うけど。

「……し、しかも泣いてる山田先生に向かって何て言ったと思う！？　「ぴいぴい泣くな駄メガネ、鬱陶しい」だよ！？」

「しつこいわねあんたも……けど、確かに引くわその言い草」

「流石にそのあと千冬姉に叩かれたけどな。山田先生が可哀想だったよ」

「その様を見て、あいつはあろう事か薄らと笑っていた。最低の男だ」

箒のひと言に、うんと頷く皆。

……確かに久々津の行いは行き過ぎてる。けど俺としては折角の数少ない男子なんだから、できる事なら仲良くしたい。

そしてその為には、あいつがちゃんとクラスに打ち解けなくちゃならない。

「織斑。あのムカデ野郎と仲良くなんて無理だと思うぜ」

「休み時間の度にどっか行っちまうから、話し合うにも切っ掛けが……って、銀崎？　俺口に出してた？」

「顔に出てた」

何てこった。だから千冬姉にも心が読まれるのか。

ポーカーフェイスの練習した方がいいか？

「向いてないから止めとけ」

「学校唯一の男友達が冷たい……」

銀崎って時々辛辣じゃないか？　主に俺に。

そう思ってたら。

「「「「「「……」」」」」」

「ひぃっ！　ご、ごめんなさい！！」

何故か銀崎が皆に睨まれてた。

あろう事かシャルロットにまで。どうしたんだ。

「くっ、この気安さ……」

「羨ましいですわ……」

「むぅ……」

「ある意味1番の敵よね……」

「やはり消すか……」

「ひぃいっ！　すみません消さないで下さい！」

「ラウラぁッ！？　ナイフ仕舞え！」

何故か危うく友達を1人亡くすところだった。

ラウラの考えてる事は、相変わらずさっぱり分からん。

……他の奴なら分かるのか、と言われても困るけど。

「ところで一夏、『ムカデ野郎』ってなに？」

「え？」

ああそうか。鈴だけクラスが違うから知らないのか。

「転校して３０分でクラスに定着した久々津の渾名だ。右目の下に蚣（ムカデ）のタトゥーしてるから」

「蚣？」

「そう！　それがムカつくぐらい様になってるのなんのって……爆発しろ！」

「あ、あはは……銀崎君、そこまで言わなくても……」

人の良いシャルロットが、まあまあと銀崎を宥めてた。

……それにしても、やっぱり『シャルロット』って少し長いよな。それに折角の呼び名が普通になっちゃったし、何か呼びやすい渾名でも考えようか……？

まあ、それに関して今はいいとして――

「それにしても、蚣ね……あ、それってあんな感じの？」

「うん？」

鈴が指差した先を向いてみる。

そこには。

「……」

「「「「「「なぁっ！？」」」」」」

何時の間にか、俺達と同じ席でロールパンを食べてる久々津が！

俺を含めた鈴以外の全員が、同時に声を上げた。

「き、ききき貴様！？　何時からそこに！」

「さっきから居た。他に席が空いてなかったからな」

「え？　本人？」

ラウラの問いに、淡々と答える久々津。

と言うかもしかして、今までの会話全部聞かれてたのか！？

「……お前達が、俺に対して何を思おうが勝手だがな」

聞かれてたよ！　き、気まずい……。

「ひとつだけ、言っておく」

そう言うと、久々津はロールパンを飲み込んで、ゆらりと席を立った。

そして無機質な黒い眼で、俺達をゆっくりと見回して――

「タトゥー（これ）は、アカムカデだ」

頬の蚣をひと撫でして。

ぼそりと呟き、行ってしまった。

いや。確かに赤いけれども。

「一夏……俺、あいつのキャラが分からなくなった」

「奇遇だな銀崎……俺もだ」

けど、なんか……やっぱり根っこから悪い奴だとは思えないんだよな……。

オリジナルキャラクター紹介（前書き）

銀「つーわけで、オリキャラ紹介だ！」

久「……何故俺まで」

？「諦めなさい。面倒なのは理解しているけれど、これも主の定めた事」

銀「へ？　あんた誰？」

カ「私の名前はカーテンコール。神の代行者」

銀「神ってあのボケ爺さんかよ。こんな美人の秘書が居たんなら紹介して欲しかった」

久「神など居ない……下らん」

カ「そう思うのはあなたの勝手。けれど私がどう名乗るかも私の勝手。……違って？」

久「……好きにすればいい」

カ「聞き分けの良い子は好き。あなたのような暗い目をした子は特に」

久「……お前。俺をどこまで知っている」

カ「すべてよ。可哀想なキメラの子」

久「……」

銀「なんか前書きにあるまじきシリアスなんだけど……」

オリジナルキャラクター紹介

名前：久々津（くぐつ）・オテサーネク

年齢：１５歳（生年月日不明）

身長：１７５センチ

体重：５４キロ

血液型：ＡＢ

容姿：膝まで伸ばした血のように赤い髪、光の無い無機質な黒い瞳を持つ。一切の贅肉と無駄な筋肉を削ぎ落とした、柳のような体つき。右目の下に、赤で彩られた蚣のタトゥーを刻んでいる。

出身：不明

帰属国家：無し

転生者。出鱈目な履歴で過去の全てを覆い隠された、正体不明の

人物。他人を寄せ付けず、意図的な言動で人を突き放している。世間的には『世界で3番目の男性ＩＳ操縦者』とされているが、その不透明な出自から、専用機を与えられている他2名とは異なり、反逆の恐れありとしてＩＳに搭乗することを許されていない。生体データを取る為の保護という形で学園に通わされているので、授業への出席は義務付けられていない。又、学園の外へ出る事も不許可となっている。

ＩＳ適性はＣ。

イメージＣＶ：関俊彦

（最遊記ＲＥＬＯＡＤ「玄奘三蔵」

機動戦士ガンダムＳＥＥＤ「ラウ・ル・クルーゼ」など）

イメージソング：『Ｏｖｅｒ　ｔｈｅ　ｃｌｏｕｄｓ』

（『ＧＯＤ　ＥＡＴＥＲ』ＯＰ）

名前：銀崎飛竜（ぎんざきひりゅう）

年齢：１６歳（４月３０日生まれ）

身長：１７２センチ

体重：６０キロ

血液型：Ｏ

容姿：茶色の短髪に赤い瞳のイケメン。中肉中背だがしっかりと筋肉は付いている。

出身：日本

帰属国家：日本

『世界で２番目の男性ＩＳ操縦者』にして、神の手による転生者。原作キャラクターによるハーレムを目指しているが、いかんせん間が悪く空回りしている。一夏とは友好的な関係を築いており、それが彼女達との溝を深めていたり。悪い人間ではないのだが、その生来の在り方からか３枚目と称されており、女子生徒達からの評価は「友達にはいいけど恋人にはちょっと……」らしい。

母の勤め先である、とあるＩＳ企業にテストパイロットとして所属している。実はラウラより強い。

ＩＳ適性はＳ。

専用機は４脚型ＩＳ『牙神』。

イメージＣＶ：森田成一

（ＢＬＥＡＣＨ「黒崎一護」

戦国ＢＡＳＡＲＡ「前田慶次」など）

イメージソング：『BRAND NEW WORLD』
（『ONE PIECE』OP）

オリジナルキャラクター紹介（後書き）

銀「……なんか、俺とムカデ野郎とで紹介文の温度差がすごい違うんですけど」

久「知るか」

カ「それもまた定め。世界に与えられた役目の違い」

久「……俺に、役目など……」

カ「きっとあるわ。私には、まだ見えないけれど」

久「……」

カ「迷って。迷子の果てに見つけるものもあるのだから」

銀「俺もこの前道に迷ったら、いい店見つけたぜ！」

久「……ふん」

カ「愛しい子。抱き締めさせてくれないのが、とても残念」

久「願い下げだ」

銀「はーいはーい！　俺２４時間受付中ですから！　もうバシバシ来ちゃっていいから！」

カ「ふふ……ああ、残念。もう時間みたい」

久「……」

カ「私は、行かないと。また会える事を、切に祈っています」

銀「ちょ、帰る前にハグハグさせてー！」

カ「ボケた神の秘書も、結構辛かったりしますのです」

銀「最後なんかはっちゃけた！？」

久「……」

銀「ぐおぉ、行っちまった……」

久「……役目……か」

静かな初夏

「おはよう、諸君。ホームルームを始める……久々津はどうした？」

「来てませんけど……」

久々津がＩＳ学園に転入して、３日。

初日以降、彼が教室に来る事は無くなっていた。

学園の一角、木々の生い茂る森林地帯。
その中にある開けた空き地の中央、そこに置かれたひとつのベンチ。
まるで隠れ家のような、そんな背景の中で。

「……」

久々津は1人、絵を描いていた。
ベンチに腰掛け、眼前のキャンバスに筆を走らせる。
彼が描いているのは、いわゆる抽象画と呼ばれる類のもので、それが何を顕わしているのかは定かでない。
意味を知るのは、彼自身のみだった。

「……そろそろ仕上げか」

呟きながら、キャンバスに色を重ねる。
赤、青、黄、紫、白、黒、緑。
統一性の感じられない彩り。傍から見れば、絵とさえ呼べないような色の羅列。

それでも久々津にしてみれば、しっかりと意味のある配色らしい。時折筆を止め、少しばかり悩むように眉根を寄せていた。

「……」

……何故彼が、授業にも出ずにこのような事をしているのか。

それは、言ってしまえば簡単な理由である。

久々津には、元々授業への出席義務が無いのだ。

世界で3番目の男性ＩＳ操縦者、久々津・オテサーネク。

しかし彼は、その過去があまりにも不透明であった。

戸籍さえ存在しない、何ひとつ身元を明らかにするものを持たない異分子。発見当初はテロリストの疑いさえ掛けられていた。

結局その疑いは杞憂だったのだが、ＩＳ学園を擁する日本政府にしてみれば、久々津の存在はいつ爆発するかも分からない爆弾のようなもの。

故に学園へ所属はさせてもＩＳへの搭乗を不許可とし、純粋な生体データのサンプル――悪い言葉で言えば、『実験体』の役目を彼に与えた。

この事は、織斑千冬を始め一般教員には知らされていない。非道

な事であると、承知しているからである。

更に言えば、久々津には外出許可さえ無い。この学園の敷地から出る事も出来ないのだ。

授業の免除は、そのせめてもの代償であった。

「ん……」

久々津としても、この扱いに不満があるかと問われれば、「ない」と素直には言えない。

けれどここ以外に行くあてがあった訳でもなく、根なし草のままでいれば男性ＩＳ適性者のデータを喉から手が出るほど欲しがっている研究施設等から、延々と逃げ続けなければならない。

それは御免だった。

「……」

絵具まみれのキャンバスに、横一線の青が入る。

……居たくてここに居る訳じゃない。

ここに居る事を余儀なくされたのだ。

真綿で首を絞められているようだと、久々津は口の端に冷たい笑みを浮かべる。

ぐちゃぐちゃの絵が、完成した。

「……寝るか」

キャンバスをそのままに、ベンチの上で横になる。

瞼を閉じながら、ふと思った。

「何でこんなところに、ベンチなんか置いてあるんだ……？」

ここは学園の敷地内でもかなり隅の方に位置している。

ついでに言えば、辺りには木が立ち並んでおり、外からこの場所が見える事は無い。

久々津のようにたまたま辿り着くか、この場所自体を知っていなければ、決して利用される事は無いだろう。

まるで、そう意図して作ったような場所だった。

「ふん……まあいいか。日当たりは申し分ないし、何より静かで絵を描くには丁度いい。誰も使ってないんなら、俺が使えばいいだけ

のこと」

下らないと思考を切り、久々津はそっと瞼を閉じる。

そよ風に身を預けた彼が眠りに就くのに、そう時間は必要なかった。

久々津の眠るベンチの背凭れ。

その後ろ側には、隅の方に小さくこう刻まれていた。

『たてなしせんよう』、と。

自由奔放、お姫様

放課後の校舎内。

人気もまばらな廊下の中、積み重なった書類を抱えて運ぶ少女が居た。

「ふぅ……」

長い髪を三つ編みに結い、眼鏡をかけた姿。

如何にも真面目そうな雰囲気を漂わせている彼女の名は、布仏虚。

このＩＳ学園生徒会の一員にして、とある家の『お手伝い』の役目を担っている。

「まったく、お嬢様にも困ったものだわ……すぐ遊びに行っちゃうんだから。仕事が溜まって泣くのは自分なのに」

書類の束が重いのか、やや覚束ない足取りで歩く虚。

どうでもいいが、名前の読みは『うつほ』である。断じて『ホロウ』では無い。

「本音は居ても仕事にならないし、人手は足りないし……はぁ」

ひとつ嘆息した後、虚は重厚な開き戸の前で足を止めた。

『生徒会室』と書かれたその扉を、書類を抱えたまま器用に開ける。

「会長、追加の書類をお持ちしましたよ。今やってる分は終わり――」

室内に入り、そこに居る筈の人物に話しかけて――言い終える前に気付いた。

しんと静まり返った生徒会室、そこには誰も居ない事に。

「会長……お嬢様？」

会長卓には、先程『会長』であり『お嬢様』が泣きながら片付け

ていた書類が、積み上がったまま。

更にその傍らに、書類でないメモ用紙が1枚、ぽつんと置かれていた。

虚は書類を手近な机に乗せると、嫌な予感で震え始めた手を伸ばし、その紙きれを手に取る。

『ごめんネ虚ちゃん、てへぺろっ☆』

「……ッ」

小筆で書いたであろう達筆。

そのくせ可愛らしい文面なのが非常に腹立たしい。

最後の『☆』がどれだけ人の怒りを煽っているか、当の本人は理解しているのだろうか。

ぶるぶると、直前までとは明らかに異なる理由で震える虚。

すぅと大きく息を吸い。

びりびりと紙きれを破り捨て。

「ゴメンじゃねぇよあんのガキィィィィィィィィィィッ！！！！！」

キャラクターを崩壊させ、咆哮した。

「あらららら……やっぱり怒っちゃったわね」

学園中に轟いたであろうその絶叫に些か目を丸くしつつ、音源の校舎を見上げる澄んだ水色の髪をした少女。

その名を更識楯無。このＩＳ学園で『最強』の称号でもある『生徒会長』だ。

「でも私は謝らない！　だってあんな量の書類、絶対片付かないか

ら！　そして生徒会室にも戻らない！　怒った虚ちゃんが物凄く怖いから！」

ビシッ！と無駄にポーズを決め、かっこ悪い事を堂々と宣言する。

ちょうど通りすがった下級生の目が、氷よりも冷たかった。

「……さ、逃げましょう。何時までもこんなところに居たら、見付かって殺されちゃうわ」

比喩でも何でもなく、今の虚に捕まれば彼女は殺されるだろう。

取り合えず怒りのほとぼりが冷めるまでは、何処かに身を隠すべきだと楯無は割と真剣に思った。

「部屋には戻れないわね、籠城に向かない構造だし。かと言って余りうろちょろしても、捕まらない保証は無し……」

悩むぐらいなら逃げ出さなければ良かったのだが、それ以上に書類が嫌だった。

やってもやっても沸いて出る。ゴキブリより性質が悪い。

命を賭けてでも、逃げる方がまだマシだったのだ。

あくまで楯無にとっては、だが。

「……うん、やっぱり『あそこ』かしら。虚ちゃんも知らないし、隠れるには――」

『どこだバ会長ォォォォォォォッ！！！』

本でも投げたのか、生徒会室のガラスが割れた。

楯無の頬から、つうと一筋冷や汗が流れる。

「やっぱり、『てへぺろっ☆』は余計だったかしら……？」

逃げた事自体が原因と思われる。

少しばかりの乾いた笑みと共に、楯無は黄昏時の中へと消えて行くのだった……。

銀崎飛竜　専用機紹介（前書き）

銀「よう、何だかあんまり出番のない銀崎飛竜だ」

久「……」

銀「相変わらず不愛想なムカデ野郎だぜ。で、美人秘書のカーテンコールさんは？」

久「……今回は居ないそうだ」

銀「えぇぇぇぇっ！？　そんな、こちとらあの人だけが楽しみでこんな前書きくんだりまで出張して来たってのに……」

久「どうでもいい。さっさと本題に入れ」

銀「神は死んだ……ボケてるだけでまだ元気だけど」

銀崎飛竜　専用機紹介

名称：『牙神（きばがみ）』

世代：第３世代

系統：近・中距離タイプ、４脚型

製造元：シュライ・キサラギ社（日本）

操縦者：銀崎飛竜

スペック　Ｓ～Ｆ

火力　Ｓ

装甲　Ａ

機動力　Ｃ

飛行速度　Ｄ

エネルギー効率　Ｂ

射程　Ｂ

操縦難易度　Ｓ

シールドエネルギー総量　９００

『ＩＳは人型である』という固定概念を捨て、獣の形状を模した最初の機体。紫のカラーリングが施された、狼のような外見をしている。現行ＩＳの中で最も巨大、４メートル近い体躯を持つ。手動ではなくイメージ・インターフェースによる精神操作により動かしている為、その操縦難易度は極めて高い。又、大きさと形状からＩＳの中では機動力にも欠けるが、その分より大型の武装を複数装備可能、４脚による射撃姿勢の安定などメリットも大きく、飛び抜けた火力を誇る。背面装甲から操縦者を露出させ、狙撃をする事も可能。

待機状態は紫のブレスレット。

武装

肩面装備２００ｍｍレールガン×２

高周波振動クロー×４

頭部口腔内装備１２連装グレネードランチャー

尾型プラズマブレード

側面装備４５ｍｍガトリングガン片面６門×２

腹部装備５連装中型誘導ミサイル

緊急用衝撃波発生装置『エスケープ』

６５口径スナイパーライフル『ノブナガ』

３連装ロケットランチャー『ユキムラ』

銀崎飛竜　専用機紹介（後書き）

銀「ま、見た目的にはＭＧＳ４のクライング・ウルフが使ってた奴みたいな感じだ」

久「馬鹿のような火力だな……それに殆どが装甲にくっついてる形か」

銀「滅茶苦茶強いぜ！　小回り利かないし実弾装備ばっかだから、ラウラの停止結界とは相性最悪だけどな！」

久「ＩＳ自体がイメージ・インターフェースにより操作される……こんなものがよく扱えたものだ」

銀「凄いっしょ！？　なんかＩＳ適性がＳじゃないとまともに動かせないらしいけど」

久「……むやみに性能だけを追求したバカが、後先考えずに弄ったんだろうよ」

銀「使い難いのなんのって。火力すげえけど」

木々に彩られた邂逅

「……♪」

怒り狂う幼馴染からの逃亡を図った楯無は、人目を気にしつつある場所に向かっていた。

そこは誰も知らない、彼女だけの秘密の場所。

去年の終わり頃にこっそりと作った、憩いの場であった。

楯無がこのＩＳ学園の生徒会長に就任したのは、１年の中頃。

それは対暗部用暗部組織、『更識』の１７代目当主である彼女にとって、生徒会長に与えられる数々の権限がとても便利なものだったからだ。

元々快楽主義者的な一面もあり、日々を楽しむ為にその権限をちょっとだけ悪用する事もあれど、基本的には『更識』として『生徒会長』として、その権力（チカラ）を使う。

そんな特異な彼女には、気付けば『１人の時間』というものが無くなっていた。

……別段、孤独が好きな訳では無い。

けれどどうしても１人で居たい時ぐらい、彼女にだってある。

寮は相部屋だし、どこに居ようと人目につく。

生徒会長とは、ＩＳ学園で『最強』の称号。それを欲して襲いかかってる生徒も少なくない。

故に楯無は考えた。

ならば１人になれる場所を作ろうと。

学園の敷地内をくまなく探し、木々に囲まれた空き地を見付けた。

そして夜中にこっそり備品のベンチをひとつ頂戴し、その場所に

運んだ。

以来そこは、楯無だけの場所になった。

疲れた時、眠い時、のんびりしたい時。

そして――泣きたい時。

『更識家当主』でも無く、『生徒会長』でも無く、『更識楯無』でも無く。

かつてあった本当の自分。幾重もの仮面に覆われ守られた、『××』として。

自分が偽りない自分で居られる、唯一の場所となった。

「ふんふふ～ん♪」

機嫌良く鼻歌を歌いながら、楯無は歩いて行く。

仮面を捨てられる、その場所へ。

歩く事、十数分。

林を抜け、開けた空き地へ出る。

「……え？」

足を止め、見えたものに楯無は目を丸くした。

空き地の中央に置かれたベンチ。

そこには、居る筈の無い自分以外の人間が居たのだから。

「……」

異様なまでに長い、どす黒い赤髪。

不健康そうな青白い肌、相反する黒の瞳。

右目の下には、特徴的な赤い蚣の刺青。

身長は一見やや低く見えるが、よく見れば組まれた脚が長い。座高が低いだけで、実際には１７５センチくらいあるだろう。

そんな特徴的な容姿をした、黒と白の逆転した学生服を着こんだ男子生徒が、ベンチに座って本を読んでいた。

「……？」

ふっと、彼の顔が上がる。

その暗い双眸が、ゆっくりと楯無に向けられた。

重ねた仮面の奥底に、自分を仕舞い込んだ少女。

人を遠ざけ、己を夜闇で包み隠した青年。

水の少女と赤い蚣の、最初の邂逅。

過去の片鱗

昼寝をした後、暇潰しに本を読んでいたら、人の気配を感じた。

顔を上げてみれば、ぼやけた視界の先に女が1人。

……さて、あの水色の髪。何処かで見た事があるような……？

「……」

「……」

向こうはこちらを凝視している。

何故ここに俺が居るのか、そんな類の視線だ。

大方こいつが此処の利用者、と言うかここを作った張本人か？

1人になりたい時には、この上ない立地だからな。

「……」

しかし気になる、あの髪の色。

水色なんてそうそう居るものじゃないし、よく見れば眼も赤い。

……そして、丁度あれと同じ色合いをした女を、俺はたった1人だけ知っている。

「……」

まあいい。今はそんな事はいい。

取り合えず目の前に居るこの女は、容姿こそ似ているが『あいつ』じゃ無い。

そして見たところ、カタギの人間でもなさそうだ。

立ち居振る舞いに、不自然過ぎるほど隙が無い。

……どうせ退屈してたし、試してみるか。

「……っ！」

「クク」

ああ、ビンゴだ。

試しに懐へ手を伸ばしてみれば、一瞬だが構えを取ろうとした。

この女が平常時だったらこれくらい冷静に対応しただろうが、どうにも少しばかり戸惑っていたようで、簡単に引き出せた。

間違いない。こいつは裏の人間だ。

「まあ、こんな物騒な施設だ。裏の人間みたいなのが居たところで驚きはしないがな」

「……なんのことかしら」

しらばっくれるか。当然だな。

だがその反応は、イエスって言ってるようなもんだぞ？

「貴方、転入生の久々津君よね？　ここを見付けたのは驚きだけど、こんなところで何してるの？」

「御明答、見付けたのはたまたま。何してるかなんて、見りゃわかるだろ？　読書だ」

「……」

あからさまに警戒してるな。

さてどうするか。正直言葉を選んで話すのは疲れるんだが、それでいらない誤解でもされたら面倒だ。

生身の戦闘じゃあ人間相手に負ける方が難しいが、だるい。

こいつ、それなりに出来そうだし。

「怖い怖い、何を警戒してるんだか。別に俺は何か企んでる訳でも、お前をどうこうする気も無いんだぞ？　蚣は確かに攻撃的だが、手を出さなければ噛まない」

「……」

めんどくせえな、警戒解けよ。

豆知識まで教えてやったのに。

「最悪、だな。ただ読書に勤しんでただけだってのに、そう怪しまれるとか」

「貴方には不明な点が多すぎるのよ。名前さえ本名かどうか分から

ない人間を、信用できると思う？」

「チッ」

……かったるい。

そもそもこいつに根掘り葉掘り聞かれる筋合いも無ければ、それに答える義理も無い。

一瞬だけこの女にかつての『仲間』を幻視して、少しだけ相手になってやろうかなどと考えたのがどうかしてた。

本当にどうかしてた。こいつを――

「揚羽（アゲハ）と重ねるなんてな……」

「……え？」

「？」

……どうしたってんだ。

揚羽の名前を出したら、驚いたように目を見開きやがった。

「……今……揚羽って……」

「……気安く俺の仲間の名を口にするな。それがどうした」
「なか、ま……？　あなた……貴方、お母さんを……知って……るの……？」
「……お母さん？」

何と。こいつは凄い偶然だ。

確かに揚羽は、俺達『5人』の中で唯一『外部』から連れられてきた人間だった。

これ位のガキが居るには、若過ぎる年齢だったが……おかしくは無い。

「……世界は狭いな」
「……教えて！　お母さんは今どこ？　どこに居るの！？」
「ふん……お断りだ」

誰がどこの馬の骨とも知れない輩……ああいや、揚羽のガキか。

だが揚羽の実子だってんなら、尚更に。

……教えてやる訳には、行かない。

「俺は、帰らせて貰う。……夕食の時間だ」

「待ちなさい！」

……あ？

この女（アマ）、誰に掴み掛かって来てんだ？

蚣は手を出せば噛み付くって、さっき言ったよな？

「きゃ、あっ！！」

「ッと……やべ」

不用意な事するから、思わず首に手刀を叩き込んじまった。

咄嗟に加減はしたが……これはしばらく起きないだろう。

取り合えず、ベンチに寝かせておくか。

「……チッ」

……揚羽の、娘。

こいつが真実を知れば、どんな顔をするのやら。

知らない方がいい。

知れば……どうなるか分からない。

「最悪、だな……」

……またひとつ、厄介な事になった。

月光に染まる赤

「……っ！」

……鈍痛を残す首を押さえながら、私は夜の闇を歩く。

目指す場所は、学生寮。

この網膜にその姿を焼き付けた『彼』と、今日もう1度会う為に。

「……」

私の母、１６代目『楯無』こと更識揚羽は。１２年前の秋、任務中に行方不明になった。

更識家は、当然総力を挙げてお母さんを探した。

けれど手掛かりの欠片さえも掴めず、時間だけが無闇に過ぎた。

そんな折に突如現れた最強の兵器、インフィニット・ストラトス。

世界各国が荒れ、その水面下で更識家も大きく動いた。

……お母さんの捜索をしている暇なんか、無いくらいに。

「やっと……」

私は脇目も振らずに鍛錬に明け暮れた。

一刻も早く『楯無』を継いで、お母さんを探す為に。

大好きだったお母さんが、このまま居なくなってしまうのが嫌だったから。

妹の簪ちゃんなんか、お母さんの顔さえ満足に覚えていないのに！

「やっと見付けた、お母さんへの手掛かり……！」

お母さんを仲間と言った彼、久々津・オテサーネク。

彼が転入して来る際にそのデータを調べ、結局何ひとつ確かな事が分からなかった不透明な存在。

だけど今は、もうそんな事どうでもいい。

「逃がさない……絶対に」

厳しいところもあったけど、本当は誰よりも優しくて。

そして誰よりも強かったお母さん。

今もまだ、絶対にどこかで生きている。

……だから。

「……」

彼がお母さんの事を知っているのなら！

例えどんな事をしてでも、居場所を聞き出してみせる！

「首を洗って、待ってなさい……！」

学生寮の屋上で、久々津は1人空を見上げていた。

黒天に浮かんでいる、零れ落ちて来そうなぐらい大きな満月。

それを見据えながら、持っていた炭酸飲料の缶をひと口、ぐいと呷る。

「……」

彼の無機質な瞳は、いつもと違いどこか優しくて悲しげだった。

小さく吹いたそよ風が、乾いた髪をぱらぱらと散らす。

「……揚羽。お前とは、良くこうして月を見たよな」

酒に弱いくせに月見酒と称して何杯も飲んで、倒れた挙句2日酔いで使い物にならなくなる。

そしてそれを『蛇』や『蜘蛛』に怒られつつも、懲りずに繰り返す。

……そんな馬鹿を、2人でしょっちゅうやった。

思えば『仲間』の中で出会ったのは1番最後だったが、絆は1番

深かった。

久々津にとって揚羽は、特別だった。

「お前の娘に会ったよ、揚羽……てかお前、ガキ居たのか。知らなかったぜ」

当然だけどな……と続け、更にひと口ジュースを呷る。

揚羽に娘が居た事は、久々津にとっても初耳。

否、恐らくは久々津の知る揚羽も、自身に娘が居たなど露とも思っていなかっただろう。

何せ彼らが出会った時、揚羽は記憶を失っていたのだから。

「お前の居場所は教えなかった……悪いな、感動の親子再会をさせてやれなくて」

ふっと久々津は月から目を逸らし、項垂れる様に下を向く。

その姿はまるで、懺悔をしている咎人のようだった。

「……なあ、揚羽――」

彼は言葉を最後まで紡ぐ事無く、後ろを振り返る。

開け放たれた屋上の扉。

そして久々津を射抜くような視線(め)で見据える、水色の髪の少女。

「よう、早かったじゃねぇか」

更識楯無が、そこに居た。

造られた『最強』

「お前が何をしに来たかは、大体分かってる。そしてそれを踏まえた上で言おう、諦める気は無いのか？」

月光に照らされる中投げ掛けた、呟きのような久々津の問い掛け。

それに対する楯無の答えは――

「あり得ないわ。力尽くでも、貴方からお母さんの情報を吐かせる」

「……当然、か」

やれやれとかぶりを振るその姿は、とてもではないが気乗りしている様には見えず。

けれど次の瞬間、無機質な瞳で彼女を睨み付けた。

「いいだろう。1番分かり易い方法でけりをつけてやる」

拳を前に突き出し、久々津は言葉を続けた。

「何をしてもいい。俺に膝をつかせれば、揚羽のことをすべて教えてやる」

「……それだけ？」

「……もっとレベルを落として欲しいのか？」

どこか投げ遣りな彼の態度に、楯無はほんの少し眉根を寄せる。

「……そう言えば、自己紹介が遅れたわね。私は更識楯無、このＩＳ学園で最強を意味する『生徒会長』よ」

「ふぅん……で？　これ以上のハンデは要るのか要らないのかどっちだ」

「っ……後悔しても知らないわよ！」

刹那、と言うべきであろうか。

５メートル程あった間合いをすり足で詰め、一気に楯無が久々津

の眼前に現れる。

古武術の奥義、『無拍子』と呼ばれる移動法……とてもではないが、１０代の子供に修められる技術では無い。

そして反応出来ていないのか、久々津はその場から動かない。

貫った。楯無はそう確信し、彼の肺に向けて双掌打を打ち込んだ。

だが――

「なぁ、どっちだ。要らないのか？」

「なっ……！？」

確かに手応えがあった。

けれど久々津は息を詰まらせるどころか、平然とその場に立っていたのだ。

楯無は一瞬だけ驚きで目を見開くも、今度は鳩尾に蹴りを突き刺す。

ずがんっと響く音。

常人が喰らえば、呼吸停止どころか肋骨が数本粉砕するような一撃だった。

「……無しでいいんだな？」

「うそ……」

手応えは十分あった。防がれた様子もない。

けれど、久々津はまるで何事も無かったかのように、こきこきと首を鳴らしていた。

「どうして……どうして効いてないの……！？」

「？　簡単な話だ。単にお前の拳や蹴りよりも俺の身体の方が堅いだけだが」

滅茶苦茶な理屈だが、現に効いていない事を見れば嫌でも認めざるを得ない。

打撃蹴撃は効かないと悟ると、楯無は彼の袖を掴んだ。

――それなら、投げてしまえばいい！

「非力だな……お前」

「きゃあっ！？」

投げ飛ばそうと力を込めた瞬間、楯無は逆に投げられていた。
それでもくるりと空中で体勢を立て直し、着地する。
久々津はと言えば……欠伸の最中だった。
「くっ……！」
歯噛みする楯無。
けれど焦燥を振り払い、冷静に分析を始める。
「（あり得ない……急所への攻撃がまるで効かない事も、あんな細腕で私を軽々と投げ飛ばす事も……そんな事、人間の膂力で出来る訳……っ！？）」
思い至るひとつの結論。
彼女は油断なく構えつつ、久々津に問い掛けた。
「まさか貴方……遺伝子強化素体（アドヴァンスド）！？」
「……半分正解だな、正確には遺伝子強化をされた改造人間（ワイルドカスタム）だ。身体の８割以上は強化繊維と炭素フレーム、それと自己修復ナノマシ

ンで構成されている」

説明しつつ、彼は屋上の手摺りを掴む。

金属製のそれが、ひしゃげて折れた。

「さて……見ての通り化け物なんでな。うっかり加減を間違えて殺しかねない。それでもまだやるか？」

「っ……当然よ！　化け物だろうと怪物だろうと、私は絶対に諦めない！　やっと見付けた手掛かりなんだから！」

「……やれやれだ」

様々な武術の技を織り交ぜ、向かってくる楯無。

それらを圧倒的な膂力でいなし、抑え、撥ね退けながら。

久々津は思う。

「（慕われてるな、揚羽……お前の真実を教えない事は、俺の我儘なのか……？）」

２人の攻防は、月が真上に昇るまで続いた……。

小さな心変わり

「はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……」

「……」

コンクリートの地面に仰向けで倒れ、楯無は息も絶え絶えとなっていた。

そしてその姿を見下ろす久々津は、特に疲労した様子さえ無く。

ただひとつだけ、深いため息を吐いた。

「3時間。俺を相手によく粘った。正直途中何度か殺しそうになったが、ただの人間にしては大したもんだ。素直に感服したよ」

「はぁ……はぁ……」

答える事も出来ないのか、彼女はただ久々津を見上げるのみだっ

た。

けれどその眼光は未だ闘気を失っておらず、身体さえ動けば再び向かってくるだろう。

……ここまでやられて折れないか。

強い……寧ろ強情だな。

見れば、腕が弱々しくも動いている。

立ち上がるつもりなのか。まだ。

「もうよせ。既に全身疲労で動く事もままならないだろ？　これ以上無茶すれば、本当に死ぬぞ」

久々津はある程度加減した、ゆえに楯無には目立った外傷が殆ど無い。

しかしトップギアで動き続けた反動だろう、最早身体自体が限界なのだ。

ここから先は、命に拘わる。

「……ま……だ……よ……」

それでも楯無は立ち上がろうとする。

その狂気染みた行いに、久々津は再三ため息を吐いた。

「無理だってのが分からないか？　意地でどうこうなる問題じゃない。諦めろよ」

「……い……や」

よろめきながら、ゆっくりと。

それでも確かに立ち上がり、彼を睨み付ける楯無。

何故この状況でそんな目が出来るのか……けれど。

久々津はそんな彼女に、揚羽を……そして嘗ての自分を、知らず重ね合わせていた。

「……」

今のあいつは、昔の俺だ。

揚羽と最初にやりあった時、例え何度打ち据えられても、どれだけ圧倒的な力の差を見せ付けられても、決して退こうとしなかった嘗ての俺だ。

『蜘蛛』に『蛇』、『蠍』の3人を自分だけで守っていた時の俺だ。

あれは絶対に退かない。

まだ守るべきものがあった時の俺が、そうだったように。

抱いている思いは違っても、きっと決意は同じだ。

だからあいつは退かない。例え死んでも。

あいつと同じ目をしていた時の俺が、そうだったように。

「……やれやれ」

最悪、だな。

俺はどうやら、この女を少しばかり見くびっていたようだ。

揚羽の事は、別に教えて困る事じゃない。

教えなかったのは俺の我儘。ただのエゴだ。

……彼女はきっと、俺の知る残酷な真実に耐えられるだろう。

そう思った。

思ったからこそ、俺は――

「ほらよ」

自ら地面に、膝をついた。

「……え……？」

当然楯無は、驚きで目を丸くした。

彼女を見据え、久々津はほんの少し口の端を上げる。

「条件は俺に片膝をつかせる、だった。けれど俺は自分から膝をついた。つまり引き分け、ノーゲームだ」

「……？」

「訳が分からないって顔してるな。要するに、またチャンスをやるって言ってるんだ」

意地と気迫だけで立ち上がった楯無だったが、正直もう彼に膝をつかせるどころか、まともな一撃を入れる事さえ絶望的だと理解していた。

そんな彼女にこの場を退かせ、尚且つ自分の我儘を少しだけ叶え

る為の手。

それが『再戦』だった。

「身体治したらまたかかって来い。俺は大概お前と最初に会った場所に居る、何時でも相手をしてやる」

「……」

「1度でもお前が俺に膝をつかせられれば、揚羽の事を教えてやるよ」

だから今は退けと続け、彼女の返答を待つ。

……ここで退き際を見極められないようなら、適当に気絶させて今後一切相手にしないつもりだった。

楯無は数秒の葛藤をしていた様子だったが――

「……わかっ……た……わ……」

その案を肯定し、直後倒れ込んだ。

地面と接触する前に、久々津は楯無をそっと受け止める。

「……すぅ」

「眠ったか。無理無いな」

そのまま彼女を抱え、久々津は屋上を後にした。

……彼が小さく、本当に僅かだが笑っていた事を知る者は――誰も居ない。

「……ところで、こいつの部屋は何処だ」

小さな心変わり（後書き）

楯無がミステリアス・レイディを使わなかった理由。

別に意地とかでも何でも無く、実際１度起動させようとしたがその時の隙を突かれて痛手を負わされ、単に起動させられなかっただけ。

ちなみに久々津と楯無の戦力差は

生身　久々津＞＞楯無

ＩＳ　楯無＞＞＞＞＞久々津

役得と決意

やあ皆。三千世界が認めるオリ主、銀崎飛竜だ。

……発言が図々しいとか、誰だっけお前とかお願いだから言わないで。

どうせ俺はヒロインの1人にフラグも立てられないような、能力的に駄目な方のオリ主ですよ。ポジション的には精々、主人公の横で騒いでる3枚目な友達キャラですよーだ。

いやもう、実際現在進行形でそんな感じなのが辛い……。

「だがしかぁし！　そんな俺にも、漸く報われる時が来たんだぜ！」

「黙れ、喧しい」

「……ごめんなさい」

ベッドに寝っ転がってるムカデ野郎こと久々津に怒られた。

……うん、実はこいつと同じ部屋なんだ俺。そうなった当初は、もうマジで世界を呪ったね。

ボケた神様に散々文句言ってやったよ……聞こえてたか知らないけど。

とにかく俺の幸運値が、低下の一途を辿っているのは間違いなかった。だってルームメイトがムカデ野郎なんだもん。

けれど……けれど！

「久々津、俺はお前に今凄く感謝してる。ありがとう」

「……くー」

「寝てるし！　俺の感謝は無意味！？」

……まあいい、寝ててくれた方が助かるぜ。

俺はゆっくりと深呼吸しながら、自分に宛がわれたベッドに視線を向けた。

「すぅ……すぅ……」

そこでは、あの『生徒会長』更識楯無が穏やかな寝息を立てているのだ！

いやぁ……久々津が何故かボロボロのこの人を抱えて連れて来た時は本当にビビった。

そして「こいつの部屋が分からん、お前のベッドで寝かせとけ」とか言って、俺の返事を聞こうともせず彼女をベッドに寝かせたあの男には、もう敬意どころか信仰心が湧いたね！

ここが東方の世界だったら、今頃久々津は神力に目覚めて神の１柱として祀り上げられてた事だろうよ、俺限定で。

だってあの楯無会長が、まるで子供みたいなあどけない寝顔を見せてるんだぞ！

可愛い……超可愛い！

何で久々津が彼女を連れて来たのかとか、どうしてボロボロなのかとか気になるっちゃ気になるけど、この寝顔見てたらもう思いっきりどうでもよくなったわ！

「んぅ……むにゃ……」

「……うっ……ぐすっ……」

やべ、嬉しさと感動のあまり涙が。

神様仏様久々津様、本当にありがとうございます。

特に久々津……もうお前には足を向けて寝れねえよ。

「つぅかこれ、添い寝か？　添い寝していいのか？」

だって楯無会長、俺のベッドで寝てるし。

他に寝れるところ無いし、もう不可抗力だよなこれ。

友達関係なら簡単だろうけど、男女の関係に持ってくには恐らく今のところ作中で1番難易度の高いこの人と添い寝していいんだよな！？

……楽園は……ここにあったぜ。

「久々津様マジ感謝感激雨あられ。折角頂いたチャンスだ、ここで行かなきゃ男が廃る」

据え膳食わぬは男の恥、もし楯無会長が起きて騒ぎになったとしても、そしたら全部久々津の所為だ。神様呼ばわりしといてあれだけど。

まあ織斑先生辺りには拳骨食らわされるかも知れんけど、それでこの一夜の幸せが手に入るなら安い安い！

では、いざ参る。

「失礼しま〜っす」

「……くぅ……くぅ……」

「うぉぉ……近くで見ると破壊力抜群だこれ。零落白夜なんてメじゃねぇぜ」

頭の中で、「いや比べるなよ」と一夏の声が聞こえた気もするけど、多分気の所為だ。

……うん、天使どころか女神の寝顔だぜこれは。ＢＤバージョンでしっかりと脳内保存しておかねば。

「うぅう……幸せだ……」

楯無会長は、前世で見たアニメや小説の中でもかなり好きなキャラクターだった。

だがこの人もいずれは一夏に惚れるのかと思うと、何だか悲しい。

そうならない為には、俺自身がこの人にフラグを立てるしかないのだが……。

「セシリアもシャルロットもラウラも、悉く失敗したし……」

まだチャンスが無い訳じゃないけど、俺はお世辞にも彼女等に好かれてないし。

フラグメーカー朴念仁、一夏の実力を甘く見てたのが悪かった。

それに皆からすれば、俺は一夏と2人きりになるのを邪魔する障害物みたいなもんだしなぁ。

「……ん？」

いや待て待て。考えてもみろ。

原作では楯無会長は、亡国機業（ファントム・タスク）から一夏を護衛する為に、一時期同室になってた。

まあ実際は、もっと前から一夏の周囲には気を配っていたと思うけど。

何せあいつは第2回モンド・グロッソが開催された時に、1度攫われてるんだ。念には念を入れてあったと思う。織斑先生ブラコンだし。

だが。まだ楯無会長と一夏は、直接会った事が無い。

流石に会った事も無い相手にフラグを立てるなんて、さしもの一夏であろうと無理だ。……たぶん。

つまり、つまりだ。この時点で楯無会長と知り合って置けば、俺は一夏より有利な立場でフラグ立てが出来る！

この人の立場上、積極的にこちらから接触すればかえって怪しまれそうだったから動けなかったが……まさかこんな形で突破口を見い出せるとは！

久々津には本当に感謝だな、これは！

「俄然やる気が湧いて来たぜ……俺はやる！」

小さく決意の声を上げる俺。

そしてその決意を胸に、そのまま俺は眠りに就く。

うん。今日は、いい夢が見られそうだ……。

ピピピピ、ピピピピ

「……ん、んぅ」

「……あ。私、寝ちゃってたんだ……」

「ここは……寮の部屋？」

「私の部屋じゃない……もしかして久々津君の――」

「……ふあぁ……あ、どーも」

「……えっと……誰かしら？」

ちなみに久々津はシャワー中だった。

役得と決意（後書き）

楯無の扱いをどうするか検討中……。

久々津のヒロイン？　飛竜のヒロイン？

意見があれば、お待ちしています。

「はぁぁぁッ！！」

楯無はゆらゆらと緩急をつけた動きで、見事久々津の背後を取った。

そしてその後頭部に、手加減ならぬ脚加減無しのハイキックを叩き込む！

「ッ」

それにより、ほんの少し。ほんの少しだが、久々津の体勢が崩れた。

これを好機とばかりに、楯無は追撃を図るが――

「……そいつは悪手だな」

「きゃんッ！？」

それよりも早く、久々津が彼女の額を指で弾く。

いわゆるデコピン……だが、化け物染みた彼のそれはまるでハンマーのような威力であり、楯無は脳が揺さぶられる様な衝撃に襲われた。

脳震盪には至らなかった様だが、数歩たたらを踏む。

そんな、決定的な隙を見せた。

「飛べ。空高く」

「きゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！！」

久々津は楯無の襟首を掴み、そのまま垂直に上へと放り投げた。

4、5メートルは飛んだだろうか。頭へのダメージで受け身を取る事もＩＳを起動させる事も出来ず、彼女は悲鳴を上げながら地面に落下する。

そして、パニックに陥ったまま頭から衝突してしまわんとした寸前に。

「……お帰り」

久々津に今度は足首を掴まれ、事無きを得るのだった。

「うぅっ……」

半ば放心状態の楯無。目が漫画のようにぐるぐると回っている。

それでもスカートを押さえている辺りは、流石と言うべきなのであろうか……？

……とにかく、またしても彼女の敗北であった。

既にあの屋上での戦い……否。戦いとさえ呼べなかった、一方的な蹂躙から数日。

全身疲労からの全身筋肉痛のコンボでまともに動く事も出来なかった翌日を除き、連日久々津へと挑む楯無だったが……。

「今日でお前の5連敗だな」

「うぐっ」

聞いての通り、結果は惨憺たるものだった。

打撃も関節技も投げ技も効かない。素手では到底敵わないと見て木刀や薙刀を持ち出し、昨日などは弓矢まで使った。

けれど、どれも惨敗。

改造人間特有の異常なタフネス。この5回の戦闘で、楯無は未だ彼に有効な1撃すら入れた事が無い。

殴った拳の方が痛むなど、どんなふざけた身体だ。

「……まだ頭が少し揺れてるわ……ただのデコピンでここまでされるなんて、おねーさん驚きよ……」

「それは貴重な体験をしたな。人生何事も経験だぞ」

「誰の所為よ誰の！」

すっとぼけた事をのたまう久々津に、額がくっ付きそうな勢いで迫る楯無。

彼は相変わらず何を考えているか分からない無機質な瞳で、じっと楯無を見ていたが。

「……その、なんだ。顔が近い、照れる」

そう言って頬を軽く染め、ふいっと視線を逸らした。

表情や感情に欠ける節のある久々津のそんな行為に、楯無も少し慌てる。

「え？　あ、ご、ごめんなさい……」

「まあ嘘だが」

刹那、頬の赤みなど何処に行ったのか、けろりと一瞬前の無表情に戻る久々津。

……嵌められた！

普段は専ら嵌める側である彼女は、こうも簡単にからかわれた事に対して言いようの無い敗北感に襲われる。

舌戦でも肉弾戦でも、彼の方が数枚上手らしい。

「……あの楯無会長が手玉に……て言うか久々津、お前ってそんな

キャラだったのか」

「概ね。初対面の人間に対して辛辣な態度を取るのは、人間社会での常識だろうが。非常識だなお前……えっと……十島？」

「銀崎だよ！　なんだよそのあり得ない間違え方は！？　つうかどんな常識だよ！！　何処の異星人の常識だよ！！」

久々津の横に座り、喚いている銀崎。

そう。何故かこの3人で食堂の一角に陣取り、昼食を共にしているのだ。

「しかしまあ……どうしてお前と会長がバトッてるんだよ。しかも会長全敗って……久々津何者だよって話だぜ」

「馴れ馴れしく話し掛けるな屑が。お前を連れて来たのは、単にこいつの相手をさせる為だ。俺とじゃなくこの女と話せ」

「辛辣なのは何ひとつ変わってねえし！　俺は引き摺られてきた被害者なのに！！」

更に喚き出した銀崎。けど内心では、楯無と共に食事ができて狂喜乱舞している。

……要するに、負けた後も自分についてくる楯無を鬱陶しく思い、適当な奴に相手をさせようと思った久々津が一夏達と一緒に居た銀

崎を偶々見付け、有無を言わさず引き摺って来たのだ。

その際に一夏が「俺も一緒にいいか？」と尋ねて、乙女達に理不尽な制裁を受けたのは余談である。

「くすんくすん……久々津君が冷たくて、おねーさん泣いちゃう」

「元気出して下さい楯無会長！　話し相手なら俺が！」

「あらありがとう……えっと……木村君？」

「銀崎です。下の名前は飛竜です」

久々津が手玉に取れないので、仕方なく銀崎をからかい始めた楯無。

……それが彼の狙いであり、寧ろまたしても手玉に取られているのは気付かないふりである。

「うん、飛竜君ね……イャンクック？」

「せめてリオレウスでお願いします！！」

「分かったわ、イャンクッ君」

「分かってないし！？」

からかいやすい相手にシフトして、調子を取り戻したらしい楯無。

パッと広げた扇子には、『復活』と書かれていた。

蚣と水精、空飛ぶ竜（後書き）

未だ、楯無の扱いを検討中。

久々津か……飛竜か。

ご意見お待ちしております。

面影

久々津は少々苛立っていた。

……原因は、今も自分の目の前に座り、にこにこと笑顔を振りまいている少女。

そう、更識楯無の所為である。

「ねえ久々津君。貴方っていつもロールパンとサラダしか食べてないけど、それだけで足りてるの？　良かったらおねーさんの唐揚げ分けてあげる、はいあーん」

「要らん」

「はいはいはい！　俺！　俺欲しいです！」

……ついでに、横で騒いでいる飛竜（バカ）も含む。

「（チッ……変に懐かれちまったもんだ）」

連日手合わせを挑んで来るのはいい。

言い出したのは自分からだし、何よりこれは自分の我儘を叶える為の事。

……だが、それが終わった後もこうして纏わり付かれるのは別の話だ。

久々津は元々静寂を好む。喧騒を嫌い、不必要な会話を嫌う。

そして何より……人との深い関わりを忌避している。

「（けどどうにも揚羽の面影をチラつかせるこいつに、強く言えねえし……どうしたもんか）」

せめて幸いなのは、似ていると言っても親子似の容姿な事か。

揚羽はもっと憂いのある顔立ちで、どちらかと言えば気弱そうな雰囲気を漂わせる女性だった。

それに楯無と違い、決して口数も多い方では無く。

つまり一緒に居ても、煩くなかったのだ。

「（いっその事このバカ……ええと、中山？　とにかくこいつ辺りとくっ付いてくれれば楽なんだが）」

ちなみに銀崎である。

どうにか仲良くなろうと、必死に楯無と話している姿は久々津としても見ていて少しだけ面白かったが、出来ればもっと遠くでやって欲しかった。

人の喚き声ほど喧しいものは無い。

「……んぐ」

気を紛らわそうと、ロールパンを齧る。

そんな彼の姿に、ふと楯無が首を傾げた。

「あら？　久々津君、ロールパン真ん中から食べるの？　お母さんと同じなのね」

「……そもそも揚羽に食い方を教わった」

何故か彼女は、ロールパンを真ん中から食べる事に異様に拘っていた。

ハンバーガーを齧るのにも苦労する様な久々津の小さな口では、正直食べ辛いやり方だが……もう習慣である。

「ふぅん……お母さんと仲、良かったんだ」

「数少ない仲間だったからな」

「ねえ、お母さんとは何時会ったの？」

「……教えるか、バカが」

「むぅ」

こうして隙あらば聞き出そうとしてくるのだから、抜け目ない。

「何時か絶対聞き出すんだから」

「……なら当分無理だな」

「くすんくすん……久々津君がいじめる……」

「ゴルァ久々津っ！　なに楯無会長泣かしとんじゃおんどりゃあっ！！」

彼女の嘘泣きに反応し、久々津へと飛びかかった飛竜。

1秒後、彼はテーブルに顔をめりこませていた。

「ん～、ごちそうさま。……そう言えば久々津君、来週だったかしら？」

食事を食べ終えた楯無からの、唐突な問い。

「何がだ」

「何って、臨海学校よ。来週からでしょ？」

……臨海、学校？

……。

「知らん、今初めて聞いた。それにどうせサボる」

「勿体ないわよ？　折角外に出られるチャンスじゃない」

「海になんぞ行っても仕方ない」

確かに、外出許可の無い久々津にしてみればそうは無い機会だろう。

しかしながら、彼の反応は今ひとつだった。

「俺には授業への出席義務も、行事への参加義務も無い。単なるモルモットとしてここに来たんだからな、必要無い」

「それは……」

久々津の言葉に、少なからず彼の内情を知っているであろう楯無は口籠る。

「……いちいち気にするな、うざったい」

「……ええ」

気にしてない、ようには見えない。

生徒会長としては、一生徒の不遇に思うところがあるのだろう。

……そんな、僅かに目を伏せた彼女の姿は、母親のそれによく似ていた。

「……チッ」

面倒そうに舌打ちした後、久々津は席を立つ。

どうにも……あの顔には弱い。

「……考えておいてやる」

「え……？」

「フン、じゃあな……それと、手合わせ以外で余り絡んで来るなよ」

言った事に対し、楯無が何かを返す暇も無く。

久々津は、足早に食堂を去ってしまった。

「……あ、あ！　ね、ちょっと待ってよ久々津君！」

突然の行動にしばし放心するも、久々津の後を追いかける楯無。

……楯無が追いついた時、彼がとても迷惑そうな顔をしていたの

は、言うまでも無い。

「……ぅ、痛てて……」

飛竜が目覚めた時、周囲にはもう誰も居なかった。

「オチ担当かよ！？　チクショー、グレてやるーっ！！」

面影（後書き）

楯無ヒロイン化アンケート途中経過

久々津のヒロインに　５票

飛竜のヒロインに　０票

臨海学校終了後、決定します。

このまま久々津のぶっちぎりか、飛竜が巻き返すか。

ご意見、お待ちしています。

蚣は眠る（前書き）

楯無ヒロイン化意見まだまだ募集中。

どうぞよろしくお願いします。

蚣は眠る

「……くー……くー……」

制服のままベッドに寝転がり、寝息を立てている久々津。

変わり無いいつもの光景。

けれど、いつもとは決定的に違うところがあった。

「久々津君……久々津君っ、起きて下さいぃ～！」

涙目になりながら、必死で彼を揺り起そうとしている女性。

久々津の所属する1年1組の副担任、山田麻耶。

彼女が何故、ここに居るのかと言えば……

「起きて下さい久々津君！　もう晩御飯の時間ですよぉ～！」

早い話がそうなのである。

ついでに言えば、部屋もいつもの寮では無く。

ＩＳ学園臨海学校の宿泊地である、『花月荘』の１室であった。

「……くー」

「うぅう……起きてくれません……」

最早半泣きで呟く麻耶。

対して久々津は、起きる気配さえ無い。

……楯無に「考える」と言った通り、彼は臨海学校には参加した。

行きのバスでも始終テンションが低く、これを機に仲良くなろうとでも思ったのか頻りに話し掛けて来た一夏への対応も、かなり辛辣だったが。

『話し掛けるな屑』

『黙れ、縊るぞ』

大体こんな調子で、流石の一夏も頬を引き攣らせていた。

寧ろ彼に好意を寄せている少女達の方が怒りを露わにしていたが、久々津はそんなもの羽虫程度にしか思っていない。

旅館に着いた後も、自由時間中に泳ぐどころか早々部屋で眠ってしまい、夕食の時間になっても姿を見せない彼を心配した麻耶が訪ねて来て、今に至るのである。

「……」

ちなみに久々津は個室だ。

一夏と飛竜は夜中に女子が押し掛けて来かねないとの事で、２人とも担任である千冬と一緒の部屋になっているが、転入時にクラス全体に辛辣な言葉を吐き、以降は姿さえ碌に見せない彼を訪ねる生徒は皆無だろうと教師間で結論が出され、そうなっている。

麻耶は暫くの間、久々津を何とか起そうと揺すっていたが、終ぞ目覚めず。

「うぅ……久々津君の分は取っておいて貰いましょう……ぐすっ」

結局泣きながら、彼の部屋を後にするのだった。

夜も更け、食事と入浴を済ませた生徒達が各々の部屋で談笑に興じている頃。

「……ん」

すっとその双眸を開き、久々津は目を覚ました。

「……」

音も無く、手を使わずに身体のバネだけで起き上がる。

今の今まで寝ていたとは思えない、敏捷な動きであった。

「9時前か……」

暗い部屋の壁に掛けられた時計を一瞥し、首を鳴らす久々津。
昼から食事を摂っていないが、ずっと寝ていた為か特に空腹は感じない。
やや固まっていた身体をしならせ、ほぐす。
「……」
どうするか。
眠気を残していないクリアな思考で、久々津は考えを巡らせる。
これ以上は暫く眠れそうにも無い。食事も別に要らない。
かと言ってここに居ても退屈を持て余すだけ。
絵の道具も持ってきてない。どう時間を潰すか……。
「……海でも、見に行くか」
夜の海は嫌いじゃない。
結論を出し、久々津は部屋を出た。

「出入り口は……確かこっちだったな」

静かな動作で廊下を歩く久々津。

誰かに見付かっても困る事は無いが、面倒ではあると思っていた。

故に余り人目につかぬよう、少しだけ注意して歩く。

……そうしていると、角を曲がったところで。

「……？」

奇妙なものを見付けた。

「「「……」」」

「何だあれ……」

３人の女子生徒が、部屋の扉に耳をくっ付けて息を潜めていたのだ。

何故か通夜の最中の様な、暗い表情で。

「……」

多分関わると面倒だ。さっさと行こう。

そう思い、未だこちらに気付いていない彼女等の後ろを、足音を立てず速やかに通り過ぎ――

バンッ！！

「「「へぶっ！？」」」

ようとしたところで、突然ドアが勢いよく開けられ、ぴったりと耳を寄せていた3人がそれに殴られた。

一様に悲鳴を上げ、衝撃に倒れる女子達。

そして。

「何をしているか、馬鹿者どもが」

部屋の中から、呆れたような顔をした千冬が現れた。

「は、はは……」

「こんばんは、織斑先生……」

「そしてさようならっ！！」

聞き耳を立てていたのがバレた事により、脱兎の如く逃げ出す3人。

だがその内2人は襟首を掴まれ、残る1人は浴衣の裾を踏まれ、すぐに捕まった。

「盗み聞きとは感心しないが、ちょうどいい。入っていけ」

「「「えぇっ！？」」」

「（……体術は揚羽の娘より若干上、ぐらいか……やるな）」

それを見ていた久々津は、千冬の生身での実力にやや関心を見せた後、俺には関係無いとばかりに立ち去ろうとするが――

「おい久々津、何処へ行く。お前もだ」

「……あ？」

「「「え？」」」

彼に向けてちょいちょいと手招きする千冬。

何で俺が、関係無いだろと言いたげな顔を向ける久々津。

そして今になって漸く久々津の存在に気付いたのか、素っ頓狂な声を出す3人。

「ああ、そうだ。ついでだから、他の2人――ボーデヴィッヒとデュノアも呼んでこい」

夜の海を見に行けそうには、無かった。

宵闇

「なあ……お前ら、一夏(あいっ)のどこがいいんだ、ん？　言ってみろ」

ビールをゴクゴクと呷りながら、眼前で横並びに座っている女子達……右から篠ノ之箒、凰鈴音、セシリア・オルコット、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィッヒの5人に向け、そう尋ねる千冬。

彼女の両脇には、何処かげんなりした茶髪に赤眼の男と、無表情な赤髪黒眼の男。

銀崎飛竜と久々津・オテサーネクが、それぞれ腰掛けていた。

「……」

一見無表情な久々津だったが、内心では大分苛立っている。

訳も分からず部屋に引き摺り込まれた挙句、いわゆる『ガールズトーク』に巻き込まれたのだ。

彼の眉間にほんの少し皺が寄っている事には、誰も気付いていない。

……何でこんな場に呼ばれたんだ？

「わ、私は別に……以前より腕が落ちているのが腹立たしいだけですので」

「……織斑先生は『あいつ』としか言ってないのに、真っ先に一夏の事が思い浮かぶ時点で黒だよ箒ちゃん……」

「なっ！？　う、煩いぞ銀崎！　箒ちゃん言うな！！」

手にしたラムネを傾けながらの箒の言葉に、力無く意見した飛竜が怒鳴られる。

けれど実際その通りなので、怒鳴り方にもやや覇気が無い。

「あたしは、腐れ縁なだけだし……」

ぷいと顔を背けながら言う鈴。

……事情を殆ど知らない久々津だったが、取り合えず目の前の５

人が自分にバスの中で散々話し掛けて来たうざい男……世界で最初の男性ＩＳ操縦者、織斑一夏に対して好意を抱いている事はすぐに分かった。

と言うか、こんなあからさまな態度で分からない方がどうかしている。

だが……話を聞くに、当事者である織斑一夏は彼女らの気持ちにまるで気付いていないらしい。

病院に行った方がいいんじゃないかと、率直に思った。

「わ、わたくしはクラス代表としてしっかりして欲しいだけです」

これまた分かりやすい態度で、ツンと言い放つセシリア。

久々津は心底馬鹿らしく思ったのか、内心で嘆息する。

「ふむ、そうか。ではそう一夏に伝えておこう」

「「「言わなくていいです！」」」

千冬の言葉に態度を一変させ、一斉に詰め寄る3人。

もしこれを伝えられでもしたら、あの世界屈指の唐変朴の事だ。絶対言葉通りに受け取るに決まっている。

ただでさえ上手く行っていないのに、これ以上話をややこしくしたくない。

それが、彼女等の共通見解だった。

「僕――あの、私は……やさしいところ、です……」

そんな中でぽつりと、しかし真摯な声音でそう言ったのは、シャルロットだった。

「あいつは誰にでも優しいぞ」

「そうですね……そこがちょっと、悔しいかなぁ」

あははと照れ笑いする。

千冬は最後に、今までひと言も発していないラウラへと視線を向けた。

「で、お前は？」

「……つ、強いところが、でしょうか……」

びくりと身をすくませながらも、そう彼女は言葉を紡ぐ。

「いや弱いだろ」

けれど千冬は、にべもなくそう返した。

それに対し、ラウラが食ってかかる。

「つ、強いです。少なくとも、私よりは」

「ふむ……まあ強いかはともかくとして、あいつは役に立つぞ。家事も料理も中々だし、マッサージだってうまい」

確かに一夏は、つい先程も千冬とセシリアにマッサージをしていた。

ラッキースケベな技能持ちやがってと飛竜は声に出さず憤慨し、久々津は苛立ちを通り越して退屈になって来たのか、顔を背けて欠伸する。

「と言う訳で、付き合える女は得だな。どうだ、欲しいか？」

千冬の言葉に、５人全員が反応した。

「「「「「く、くれるんですか！？」」」」」

「やるかバカ」

くくくと笑う千冬。

そのまま2本目のビールを開け、口にした。

「女なら、奪うぐらいの気持ちで行かなくてどうする。自分を磨けよ、ガキども」

そう、実に楽しそうに言う。

久々津はいつ話が終わるのかと、若干待ちくたびれていた。

そんな彼と、すっかり蚊帳の外で落ち込んでいた飛竜に……

「それで、お前等はどうなんだ？　気になる女の1人でも居ないのか、ＩＳ（ここ）学園なら選り取り見取りだろう」

話題を振られ、軽く舌打ちする久々津。

飛竜の方は対照的に、漸く相手にして貰えて嬉しそうに勢いよく立ち上がる。

少女達も、貴重な異性の意見に耳を傾けた。

「今は楯無会長ＬＯＶＥッス！　あの人マジ女神ッス！」

「……ふ、更識か。これはまた難儀な相手だな。手強いぞ、あれは」

「そっすね、いつもはぐらかされてメアドも聞き出せてないッス」

「……」

ちなみに久々津は楯無のアドレスを持っている。

持っていると言うか、何時の間にか携帯に入っていた。

「ああでも、飄々としてるあの人も女神……」

「……さっさとくっ付け馬鹿が……いっそ襲え」

「んな事したらラスティー・ネイルで細切れにされっからね！？

早々どうにかなる相手じゃないんだよあの人は！！」

「……役立たずが……いっそ織斑一夏（もう1人）に押し付けた方が手早く

済みそう――」

「ダメぇぇぇぇぇぇぇッ！！　あの天然フラグメーカー全人類の半

分（男）の敵に会わせちゃダメぇぇぇぇぇッ！！　俺から希望を奪わない

でくれぇッ！！」

「……」

なんだこいつ。

無機質で冷たい久々津の瞳が、口よりも正確にそう言っていた。

「銀崎も必死だな……それでお前はどうなんだ、不良生徒」

「……チッ」

舌打ちすると、久々津は徐に立ち上がった。

正直これ以上付き合っていられない。

彼は……関わりを拒むのだから。

「あ、おいコラ久々津！　何処行くんだよ、聞き逃げは許さんぞ！
お前も気になる女子の1人ぐらいゲロッてけ！」

「……」

ドアノブに手をかけ、背を向けたまま。

淡々とした声音で、久々津は告げた。

「……お前達が騒ごうが喚こうが勝手だがな……俺を巻き込むな」

久々津は最後に少しだけ振り返り、部屋に居た全員を睨み付け。

そして、その場を後にした。

部屋に戻った久々津は、明かりも点けずにベッドへと横たわる。

薄く光を残す宵闇が、彼を包んだ。

「……」

俺が愛するもの。

それは今も昔も、たった1人だ。

愛する女と、仲間3人。それだけが俺の世界だ。
それ以外は全て、どうでもいい有象無象でしかない。
それが、俺だ。
「……それでいいよな――
――揚羽」

宵闇（後書き）

臨海学校編は楯無が出せん……。

ヒロイン化意見、お待ちしています。

ただそれ童話集『不思議の国の楯無』（前書き）

本編とは全然関係ありません。全くの番外編です。

尚作者は、『不思議の国のアリス』の内容がとてもうろ覚えです。

ただそれ童話集『不思議の国の楯無』

むかしむかしのロシアの田舎町。

そこには、とても可愛い女の子が住んでいました。

「私、更識楯無！　ちょっぴりお茶目な１７歳☆」

悪戯好きな楯無は、いつも人をからかってばかり。

「ぎゃー！　俺の頭がモヒカンに！？　また楯無ちゃんだな、でも可愛いから許す！」

銀崎ベーカリーの店長さんは、そんな単純な人でした。

それはさておき。楯無はある日、無口で不愛想なお兄さんと一緒に、森へピクニックに出かけました。

そして、見付けたのです。

「これから軍事演習だ！　教官に指定された刻限まで余裕が無い、急がなくては遅刻してしまう！」

黒いバニースーツ姿の銀髪幼女が、物騒な事を言いながら走って行く姿を。

好奇心旺盛な楯無は、放任主義のお兄さんを置いて彼女を追い掛けました。

「つ～かまえた！」

「うわ何をする貴様！？　はなせ！」

2秒で捕まえました。

楯無は、とても運動神経が良かったのです。

「ねえねえ、軍事演習って何処でやってるの？」

「軍の機密を教えられるか！」

「……そういう事言うと、くすぐっちゃうんだから」

口を割らない兎さんに、楯無は得意のくすぐり攻撃を仕掛けます。

兎さんは腹筋が崩壊するほどに笑い転げ、ついには白状しました。

「……あ……あそこの……洞窟の、向こうだ……」

「そう、ありがとう兎さん♪」

るんるんとスキップをしながら、楯無は洞窟へと入って行きました。

暗い洞窟の中に、楯無はわくわくしてきます。

そしてしばらく歩いたら、大きな扉を見付けました。

「この向こうかしら」

鍵のかかった南京錠を針金でこじ開け、楯無は扉を通ります。

するとそこは、鬱蒼としたジャングルでした。

「わー、凄い」

ロシアにはジャングルが無いので、楯無は興味津々です。

そのまま奥へ入ろうとすると……

「待ちなさい、人間！」

やたらカラフルな格好をした、胸の無いツインテールの女の子が現れました。

「だれ？」

「私はチェシャ猫！　この先に行きたかったら、クイズに答えなさい！」

「ふーん、いいわよ」

チェシャ猫は何処から出したのか、ホワイトボードに問題を書き込みました。

『問題：山田麻耶。上から読んだらやまだまや。下から読んだら？』

「……やまだまや」

「正解よ、通りなさい！」

やけにあっさり通して貰えました。

楯無は奥へ奥へと進みます。

すると今度は、こぢんまりとした家を見付けました。

「ごめんくださーい」

「あらヤマネさん。お客様のようですわね」

「そうだね帽子屋さん。お客さんだね」

そこに居たのは、金髪縦ロールの帽子屋と、同じく金髪の中性的な少女でした。

何故か互いに、熱々の紅茶をぶっかけあっています。

「王子様と結婚するのはわたくしですわ！」

「違うよ、僕だよ！」

どうやら王子様の取り合いをしているようです。

こんなところでまで女の醜い争いを見たくなかった楯無は、取り合えず2人を簀巻きにして川に放り込みました。

「「がぼがぼがぼがぼ」」

残っていた紅茶を1杯貰い、楯無はまた軍事演習の会場を探します。

きょろきょろと辺りを見回していると、向こう側から白馬に乗った青年が現れました。

彼の名はワン・サマー。行く国行く国で王女や貴族令嬢やメイドに至るまで無意識にフラグを立てまくる、外道腐れ野郎でした。

「あ、すいませんお嬢さん。この辺でガラスの靴を履いて毒リンゴを食べて伸ばした髪で塔の最上階から降りた女の子見ませんでした？」

んな奴居る訳ない。

新手のナンパと判断した楯無は、取り合えず王子様を簀巻きにして川に放り投げました。

「がぼがぼがぼがぼ」

さて、物語も大詰めです。

ジャングルを抜けた楯無は、ついに軍事演習場を見付けました。

「ふはははは！　圧倒的ではないか、我が軍は！」

無数の兵士達……一様にメタリックなウサ耳を付け、「タバネサンダヨ！」と繰り返すロボット兵士に囲まれ、高笑いを上げている女性。

彼女こそがこの国の女王であり、軍の最高責任者も兼任した傑物。

サウザンド・ウィンターです。

「む？　おいそこの雑種ぅ！　何処から紛れ込んだ！」

「え、私？」

どこぞの慢心王のようなノリのサウザンド・ウィンター。

楯無はロボット兵士ターバネーターに捕えられ、椅子に縛り付けられました。

「ねえ、私どうなるの？」

「ふはははは、知れた事！　今から私と「「「タバネサンダヨ！」」」だー！　かぶせるな馬鹿どもが！」

サウザンド・ウィンターは、楯無にチェス勝負をするように言います。

勝てば無傷で返してくれる。

負けたら体を改造して、ここに居るターバネーターの一員にするそうです。

「さあ、勝負――

そんな中途半端なところで、楯無は目を覚ましました。

「……ううん……あれ、兄さん？」

「起きたか妹」

右頬に蚣の刺青を刻んだ兄の顔が、上にあります。

楯無は、お兄さんに膝枕をして貰っていました。

「魘されていたぞ。あと寝言で軍事演習がどうとか……大丈夫か？」

「あ、うん大丈夫。ごめんね兄さん、重かった？」

「軽いものだ、お前1人ぐらい」

殆ど笑った事の無いお兄さんが、楯無に向けてほんの小さくだけど笑い掛けました。

その日2人は、仲良く手を繋いで帰りました。

ただそれ童話集『不思議の国の楯無』（後書き）

書いてた自分でも訳分からん。

なんじゃこりゃ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4776z/

ただ、それだけを知りたい

2011年12月29日21時48分発行